〔C 年〕降誕前節第６主日(2026 年 11 月 15 日)

【旧約聖書日課】出エジプト記　3章1～15節

1モーセは、しゅうとでありミディアンの祭司であるエトロの羊の群れを飼っていたが、あるとき、その群れを荒れ野の奥へ追って行き、神の山ホレブに来た。2そのとき、柴の間に燃え上がっている炎の中に主の御使いが現れた。彼が見ると、見よ、柴は火に燃えているのに、柴は燃え尽きない。3モーセは言った。「道をそれて、この不思議な光景を見届けよう。どうしてあの柴は燃え尽きないのだろう。」

4主は、モーセが道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から声をかけられ、「モーセよ、モーセよ」と言われた。彼が、「はい」と答えると、5神が言われた。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」6神は続けて言われた。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは、神を見ることを恐れて顔を覆った。

7主は言われた。「わたしは、エジプトにいるわたしの民の苦しみをつぶさに見、追い使う者のゆえに叫ぶ彼らの叫び声を聞き、その痛みを知った。8それゆえ、わたしは降って行き、エジプト人の手から彼らを救い出し、この国から、広々としたすばらしい土地、乳と蜜の流れる土地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人の住む所へ彼らを導き上る。9見よ、イスラエルの人々の叫び声が、今、わたしのもとに届いた。また、エジプト人が彼らを圧迫する有様を見た。10今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」

11モーセは神に言った。「わたしは何者でしょう。どうして、ファラオのもとに行き、しかもイスラエルの人々をエジプトから導き出さねばならないのですか。」12神は言われた。「わたしは必ずあなたと共にいる。このことこそ、わたしがあなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたたちはこの山で神に仕える。」13モーセは神に尋ねた。「わたしは、今、イスラエルの人々のところへ参ります。彼らに、『あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのです』と言えば、彼らは、『その名は一体何か』と問うにちがいありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。」

14神はモーセに、「わたしはある。わたしはあるという者だ」と言われ、また、「イスラエルの人々にこう言うがよい。『わたしはある』という方がわたしをあなたたちに遣わされたのだと。」15神は、更に続けてモーセに命じられた。

「イスラエルの人々にこう言うがよい。あなたたちの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主がわたしをあなたたちのもとに遣わされた。

これこそ、とこしえにわたしの名
これこそ、世々にわたしの呼び名。

【使徒書日課】ヘブライ人への手紙　8章1～13節

1今述べていることの要点は、わたしたちにはこのような大祭司が与えられていて、天におられる大いなる方の玉座の右の座に着き、2人間ではなく主がお建てになった聖所また真の幕屋で、仕えておられるということです。3すべて大祭司は、供え物といけにえとを献げるために、任命されています。それで、この方も、何か献げる物を持っておられなければなりません。4もし、地上におられるのだとすれば、律法に従って供え物を献げる祭司たちが現にいる以上、この方は決して祭司ではありえなかったでしょう。5この祭司たちは、天にあるものの写しであり影であるものに仕えており、そのことは、モーセが幕屋を建てようとしたときに、お告げを受けたとおりです。神は、「見よ、山で示された型どおりに、すべてのものを作れ」と言われたのです。6しかし、今、わたしたちの大祭司は、それよりはるかに優れた務めを得ておられます。更にまさった約束に基づいて制定された、更にまさった契約の仲介者になられたからです。7もし、あの最初の契約が欠けたところのないものであったなら、第二の契約の余地はなかったでしょう。8事実、神はイスラエルの人々を非難して次のように言われています。

「『見よ、わたしがイスラエルの家、またユダの家と、
新しい契約を結ぶ時が来る』と、
主は言われる。
9『それは、わたしが彼らの先祖の手を取って、
エジプトの地から導き出した日に、
彼らと結んだ契約のようなものではない。
彼らはわたしの契約に忠実でなかったので、
わたしも彼らを顧みなかった』と、
主は言われる。
10『それらの日の後、わたしが
イスラエルの家と結ぶ契約はこれである』と、
主は言われる。
『すなわち、わたしの律法を彼らの思いに置き、
彼らの心にそれを書きつけよう。
わたしは彼らの神となり、
彼らはわたしの民となる。
11彼らはそれぞれ自分の同胞に、
それぞれ自分の兄弟に、
「主を知れ」と言って教える必要はなくなる。
小さな者から大きな者に至るまで
彼らはすべて、わたしを知るようになり、
12わたしは、彼らの不義を赦し、
もはや彼らの罪を思い出しはしないからである。』」

13神は「新しいもの」と言われることによって、最初の契約は古びてしまったと宣言されたのです。年を経て古びたものは、間もなく消えうせます。

【福音書日課】ルカによる福音書　20章27～40節

27さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。28「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。29ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子がないまま死にました。30次男、31三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を残さないで死にました。32最後にその女も死にました。33すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」34イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、35次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。36この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活にあずかる者として、神の子だからである。37死者が復活することは、モーセも『柴』の個所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、示している。38神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きているからである。」39そこで、律法学者の中には、「先生、立派なお答えです」と言う者もいた。40彼らは、もはや何もあえて尋ねようとはしなかった。

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

出エジプト記　3章1〜15節

1さて、モーセはそのしゅうと、ミデヤンの祭司エトロの羊の群れを飼う者となった。そして、群れを荒れ野の奥に導いて、神の山ホレブに来た。2すると、柴の間で燃え上がる炎の中に、主の使いが現れた。彼が見ると、柴は火で燃えていたが、燃え尽きることはなかった。3そこでモーセは言った。「道をそれてこの大いなる光景を見よう。なぜ柴は燃え尽きないのだろう。」4主は、彼が道をそれて見に来るのを御覧になった。神は柴の間から呼びかけ、「モーセ、モーセ」と言われた。彼は「御前におります」と言った。5神は言われた。「こちらに近づいてはならない。履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地である。」6さらに言われた。「私はあなたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」モーセは顔を隠した。神を見るのを恐れたからである。

7主は言われた。「私は、エジプトにおける私の民の苦しみをつぶさに見、追い使う者の前で叫ぶ声を聞いて、その痛みを確かに知った。8それで、私は下って行って、私の民をエジプトの手から救い出し、その地から、豊かで広い地、乳と蜜の流れる地、カナン人、ヘト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、そしてエブス人の住む所に導き上る。9今、イスラエルの人々の叫びが私のもとに届いた。私はエジプト人が彼らを虐げているのを目の当たりにした。10さあ行け。私はあなたをファラオのもとに遣わす。私の民、イスラエルの人々をエジプトから導き出しなさい。」11モーセは神に言った。「私は何者なのでしょう。この私が本当にファラオのもとに行くのですか。私がイスラエルの人々を本当にエジプトから導き出すのですか。」12すると、神は言われた。「私はあなたと共にいる。これが、私があなたを遣わすしるしである。あなたが民をエジプトから導き出したとき、あなたがたはこの山で神に仕えることになる。」

13モーセは神に言った。「御覧ください。今、私はイスラエルの人々のところに行って、『あなたがたの先祖の神が私をあなたがたのところに遣わされました』と言うつもりです。すると彼らは、『その名は何か』と私に問うでしょう。私は何と彼らに言いましょうか。」14神はモーセに言われた。「*私いる、という者である〔ギリシア語訳→私はあるという者だ〕。*」そして言われた。「このようにイスラエルの人々に言いなさい。『私はいる』という方が、私をあなたたがに遣わされたのだと。」

15重ねて神はモーセに言われた。「このようにあなたはイスラエルの人々に言いなさい。あなたがたの先祖の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である主が私をあなたがたに遣わされました。

これこそ、とこしえに私の名
これこそ、代々に私の*呼び名〔直訳→覚え〕*。

ヘブライ人への手紙　8章1〜13節

1以上述べたことの要点は、私たちにはこのような大祭司がいて、天で大いなる方の王座の右の座に着き、2人間ではなく主がお建てになった聖所と真の幕屋で、仕えておられるということです。3すべて大祭司は、供え物といけにえを献げるために、任命されています。従って、この方も何か献げる物を持っていなければなりません。4もし、この方が地上におられるとすれば、祭司ではありえないでしょう。律法に従って供え物を献げる人たちがいるからです。5彼らは、天にあるものの*雛型〔別訳→写し〕*と影に仕えている者にすぎません。そのことは、モーセが幕屋を建てようとしたときに、お告げを受けたとおりです。神は、「山で示された型どおりに、注意してすべてのものを作りなさい」と言われたのです。6しかし今、私たちの大祭司は、はるかに優れた務めを得ておられます。この方は、さらにまさった約束に基づいて制定された、さらにまさった約束に基づいて制定された、さらにまさった契約の仲介者だからです。

7もし、あの最初の契約が欠けのないものであったなら、第二の契約が必要になる余地はなかったでしょう。8しかし、神は彼らを責めて、こう言われました。

「『その日が来る。
私はイスラエルの家、およびユダの家と
新しい契約を結ぶ』と
主は言われる。
9『それは、私が彼らの先祖の手を取って
エジプトの地から導き出した日に
結んだ契約のようなものではない。
彼らが私の契約を守らなかったので、
私も彼らを顧みなかった』と
主は言われる。
10『それらの日々の後
私がイスラエルの家と結ぶ契約はこれである』と
主は言われる。
『私は、私の律法を彼らの思いに授け
彼らの心に書き記す。
私は彼らの神となり
彼らは私の民となる。
11彼らは、自分の同胞や兄弟の間で
「主を知れ」と言って教え合うことはない。
小さな者から大きな者に至るまで
彼らは皆、私を知るからである。
12私は、彼らの不正を赦し、
もはや彼らの罪を思い起こすことはない。』」

13神は「新しい契約」と言われることによって、最初の契約は古びたものとされたのです。年を経て古びたものは、間もなく消えうせます。

ルカによる福音書　20章27〜40節

27さて、復活はないと言っているサドカイ派のある者たちが近寄って来て、イエスに質問した。28「先生、モーセは私たちのために書いています。『ある人の兄が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、兄のために子をもうけねばならない。』29ところで、七人の兄弟がいました。長男は妻を迎えましたが、子がないまま死にました。30次男、31三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子を残さずに死にました。32最後にその女も死にました。33すると復活の時、彼女は誰の妻になるのでしょうか。七人ともその女を妻にしたのです。」34イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、35次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々は、めとることも嫁ぐこともない。36この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、復活の子として神の子だからである。37死者が復活することは、モーセも『柴』の箇所で、主をアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神と呼んで、明らかにしている。38神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。すべての人は、神によって生きるからである。」39律法学者の中には、「先生、おっしゃるとおりです」と言う者もいた。40彼らは、もはや、あえて質問することはなかった。

黙想のためのノート

次主日の教会暦と聖書日課

・11 月 15 日「降誕前節第 6 主日」の日課主題は「救いの約束(モーセ)」。
・旧約日課は、「出エジプト記」から、モーセの召命譚を物語る「柴」の箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、「天の大祭司」の存在を示す箇所。福音書日課は、「ルカによる福音書」から、サドカイ派の人々との「復活」に関する論争を伝える逸話箇所。

旧約日課(出エジプト 3 章より)

・「出エジプト記」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「律法(トーラー)」の第二巻で、「申命記」まで続く「モーセ物語」の第一部を構成する。「律法(トーラー)」五巻中の四巻が「モーセ物語」を占める一方で、第一巻の「創世記」の物語は、「モーセ物語」との間に四百年の隔たりと系図の間隙があり、両者に物語上の断絶がある。にもかかわらず、「創世記」と「出エジプト記」以下の「モーセ物語」集四巻が一つにまとめられて「律法(トーラー)」五巻を構成するようにされてきた。おそらく、ユダ・イスラエルの王国形成、あるいは後の時代のユダヤ＝イスラエル共同体の形成において、おもに「アブラハム」伝承を拠り所とする部族と、おもに「ヤコブ」伝承を拠り所とする部族が、両者一致するための共通の土台として「モーセ」伝承を中心に据える選択をした結果として、「律法(トーラー)」の五巻構成が生まれてきたのだろう。
・日課箇所は、「モーセ物語」のはじめ、「モーセ出生譚」(出 1～2 章)に続く「モーセ召命譚」の冒頭箇所。ユダヤ教では「モーセの柴の箇所」として知られ、「新約」でも主イエスが「モーセの書の柴の箇所」として触れられたことが伝えられている(マルコ 12:26、ルカ 20:37)。
・この伝承説話の場面は、「神の山ホレブ」(1 節)と設定されている。「ホレブ」は、通常、「シナイ山」と同一視されるが、同じ山の別名なのか、「神の山」という概念に宛てられた名なのか、判然としない。「ホレブ」の用例は、「旧約」全体でも限られており(新共同訳で 17 例)、「出エジプト記」(同 3 例)と「申命記」(同 9 例)に偏っている。その用例のほとんどが「モーセ」の逸話と結びついているが、唯一の例外は、「預言者エリヤ」の物語でエリヤが神から召命(再召命)を告げられる場面の例である(王上 19:8)。
・この箇所は、モーセに召命を告げる「主」が「わたしはある。わたしはあるという者だ」(14 節)と自身を示された逸話として知られる。それは、モーセに問われたことに応えて示された回答であるが、他方でこの箇所中で、「主」は、自ら二度にわたって自身を「あなたの父(先祖)の神、アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」(6 節、15 節)として示している。これは、「律法(トーラー)」の構成において「モーセ物語」が「創世記」に接続するものであることを示すが、同時に、この「主」が先祖の各世代で自らの「神」と認識されてきた存在として位置づけられていることも示す。

使徒書日課(ヘブライ 8 章より)

・「ヘブライ人への手紙」は、「新約」正典中で「パウロ書簡集」に続く位置に置かれた書簡文書。末尾に書簡形式の挨拶が残されている一方で、冒頭の定型挨拶文を欠いており、差出人も宛名人も不詳となっている。2 世紀には著者差出人に関する議論があったことが教父文書から知られるが、西方教会(カトリック、プロテスタント)で論争に決着を付けないまま正典として受け入れてきた一方で、東方正教会は早い段階でこれを「パウロ書簡集」の一部とみなして扱ってきた。
・本書簡の正典的意義は、正統教理におけるキリスト救済論の土台となる「贖罪神学」を、新約正典中で事実上唯一、「(旧約)聖書」を典拠に構築してみせていることにある。旧約正典における「贖罪」は、端的に「律法」で規定される「贖罪日」の儀式(レビ 16 章)に根拠づけられる。「贖罪日」は、三大祭(過越祭、七週祭、仮庵祭)と並んで「律法」中で規定される祭事であり、ユダヤ教では形を変えながら今日まで最重要祭事として継承されてきている。規定によれば、年に一度の「贖罪日」に、大祭司は「幕屋(≒神殿)」の「至聖所」に入り、民の犯した罪の赦しを願う執り成しの祈りをささげ、その罪を贖うための犠牲を奉献する。その際、民は「幕屋」の外で祈り、大祭司の祈りと犠牲が聞き届けられて無事に大祭司が出て来るのを待つ。神殿が失われた後の時代になっても、ユダヤ人はこの「贖罪日」に断食をして祈り、無事に罪が赦され、贖罪が果たされることを願って過ごしてきた。本書簡は、この「贖罪日」規定に基づいて、イエス・キリストをこの「贖罪日」の祭儀を執行する「大祭司」の最後完全な存在として位置づけ、またその「真の大祭司キリスト」が自らを「贖罪の犠牲」として祭儀を真に完成された、と論じている。このようにキリストの出来事によって旧約祭儀が更新されたと解するキリスト論は「ヨハネ福音書」にも見られ、紀元 70 年のエルサレム神殿破壊を前提とすることなく、早い段階からエルサレム神殿を見限った祭儀神学の再構築が始まっていたとも考えられる。ただし、そのような神学的取り組みは、「共観福音書」や「パウロ書簡集」には希薄で、それらの文書ではキリストの十字架の出来事を「過越しの出来事」の更新とみなす以上の取り組みは見られない。
・日課箇所は、主イエスが「天の聖所(真の幕屋)」で「真の大祭司」となられていることを、「モーセの幕屋建設」の記述を根拠に論証しようとしている。モーセの「幕屋」は、シナイ山でその詳細な設計図が「型」として示され、それに基づいて山の麓で建設されたものとして描かれている(出 25～40 章)というのが、ここで述べられている論拠。
・8～12 節の引用元は、「エレミヤ書」31:31～34 のいわゆる「新しい契約」の約束として知られる箇所。13 節の記述は「新約」という呼称の根拠でもある。

福音書日課(ルカ 20 章より)

・日課箇所は、「受難物語」の中に置かれたサドカイ派の人々との論争譚で、共観福音書が共通に伝えている。共観福音書間で表現などに違いはあるものの、基本的な構成は質問者の発言や主イエスの応答も含めて一致しており重要な相違は見られない。

・サドカイ派の人々が提示する仮説問題は、「レビラート婚」という制度を題材にして「復活」信仰の矛盾を突こうとするもの。「レビラート婚」は、「申命記」25:5 を根拠とする制度で、「ルツ記」などにも見られるように、家系の跡継ぎを残すために、死んだ夫に代わって兄弟等の親族男性が残された妻との間に子をもうけ、死んだ夫の跡継ぎとみなす習慣。

・当時のユダヤ教世界においては、ペルシア宗教を起源とする「終末の復活」概念が広く知られており、ファリサイ派らは「終末の復活信仰」を受け入れていたが、サドカイ派らはこれを否定していた。サドカイ派から見て主イエスは、ファリサイ派と同じ「終末の復活信仰」を説いている者とみなされているが、おそらくそれは正しい。「パウロ書簡」にも、ファリサイ派としてこの「終末の復活信仰」を前提にした叙述が特段の説明なく繰り返し現れるように、主イエスと弟子たちおよび初期教会では、ファリサイは同様に「終末の復活信仰」が共有されていた。「終末の復活」は、死者がすべて終末に復活させられて神の前に立たされ「最後の審判」を受けることになる、という観念で、ペルシア宗教(ゾロアスター教)を起源としてユダヤ・キリスト・イスラム教で受け入れられてきた。ただし、ユダヤ教は必ずしも強調しないのに対して、イスラム教では主要教義の一つとされている。「ファリサイ派」(また、後の「ラビ的ユダヤ教」)が「終末の復活信仰」を受け入れてきたのは、彼らが「書かれた律法」としての『聖書』のほかに「口伝律法」を幅広く認めてきたことによると考えられる。これに対して「サドカイ派」は、「口伝律法」を認めず、『聖書』についてももっぱら「律法」を優先する立場を取っていたため、『聖書』に論拠のない「終末の復活」を認めなかった。

・主イエスの「復活」を巡る発言は、「復活したときには天使のようになる」ということと、「柴」の箇所に基づく「神は生きている者の神」ということに尽きる。前者は、「復活信仰」が通俗的には「現世の人格がそのまま復活後の後世にも続く」ものとして解されていたことを踏まえているが、主イエスの回答はそれを否定するもの。後者は、必ずしも「復活」について説明しているとは言えない発言であるが、「復活信仰」を通俗的な理解から神学的な理解に置き換える試みとして解することができる。

・モーセの「柴」の箇所は、「出エジプト記」3 章。実際にこの箇所で「アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神」と発言しているのは「主」である。「主」が死んだ先祖の神としてモーセの前に立っていることから、彼ら先祖をなお「生きている者」と解しているのだろう。

来週の誕生日 (11 月 15 日～21 日)

主日礼拝の讃美歌から

・21-208「主なる神よ、夜は去りぬ」(＝Ⅰ24「父のかみよ、夜は去りて」)は、10 世紀にさかのぼるラテン語聖歌で、従来、6 世紀末の教皇大グレゴリウスの作とされていた。曲は、17 世紀フランスの聖歌集所収の曲を転用。

・21-157「いざ語れ、主の民よ」は、16 世紀に J.カルヴァンらの指導で改革を推し進めたジュネーブ教会で編纂された詩編歌集、いわゆる「ジュネーブ詩編歌」の 124 編として作詞作曲された詩編歌。新共同訳の詩編 124 編に即して韻律化した新訳が歌詞としてあてられている。

・21-463「わが行くみち」(＝Ⅰ494 番「わが行くみち」)は、原詞が 19 世紀米国会衆派牧師 P.クックの妻マーサ P.クックによるとされるが、詳細は不明。日本語版では英語歌詞を意訳して三節にまとめている。曲は、19 世紀米国で活動した福音唱歌歌手 P.フィリップスによる。

21-208「主なる神よ、夜は去りぬ」

Nocte surgentes vigilemus omnes

1. Nocte surgentes vigilemus omnes, / semper in psalmis meditemur atque / viribus totis Domino canamus / dulciter hymnos,
2. Ut, pio regi pariter canentes, / cum suis sanctis mereamur aulam / ingredi caeli, simul et beatam / ducere vitam.
3. Praestet hoc nobis Deitas beata / Patris ac Nati, pariterque Sancti / Spiritus, cuius resonat per omnem / gloria mundum. Amen.

21-157「いざ語れ、主の民よ」

English version *OLD 124th (Now Israel may say)*

1 Now Israel may say, and that in truth: / If that the Lord had not our right maintained, / If that the Lord had not with us remained / When cruel foes against us rose to strive, / We surely had been swallowed up alive.

2 Yea, when their wrath against us fiercely rose, / The swelling tide had o'er us spread its wave, / The raging stream had then become our grave, / The surging flood, in proudly swelling roll, / Most surely then had overwhelmed our soul.

3 Blest be the Lord, who made us not their prey; / As from the snare a bird escapeth free, / Their net is rent and so escaped are we; / Our only help is in God's holy name, / Who made the earth and all the heavenly frame.

21-463「わが行くみち」＝Ⅰ-494

In Some Way or Other

1. In some way or other the Lord will provide: / It may not be my way, / It may not be thy way; / And yet, in his own way, / "The Lord will provide."

Refrain: Then we'll trust in the Lord, / And he will provide; / Yes, we'll trust in the Lord, / And he will provide.

2. At some time or other the Lord will provide: / It may not be my time, / It may not be thy time; / And yet, in his own time, / "The Lord will provide." *[Refrain]*
3. Despond, then no longer, the Lord will provide; / And this be the token— / No word he hath spoken / Was ever yet broken: / "The Lord will provide." *[Refrain]*
4. March on, then, right boldly; the sea shall divide; / The pathway made glorious, / With shoutings victorious, / We'll join in the chorus, / "The Lord will provide." *[Refrain]*